2025.09.07出前トーク要旨

|  |  |
| --- | --- |
| 1.テーマ | 不登校、妊婦・産後ケア事業、小学校再編について |
| 2.日時 | 令和7年9月7日（日）14時00分～15時30分 |
| 3.場所 | とんの幼稚園 |
| 4.出席者 | （直方市）直方市長、総合政策部長、市民部長、教育部長事務局：秘書広報課長、秘書広報係長（主催者側）NPO法人 子育てなかま　ほか（男性5人、女性23人、計28人） |
| 5.内容 | テーマに基づき、NPO法人子育てなかまの皆様と直方市長が意見交換を行いました。意見交換の主な内容は以下のとおりです。≪市長挨拶≫今年度に入り、市でも総合教育会議で次の世代にどうやって形を繋いでいくか、こどもたちが健やかに育つ環境作りをどうやっていくかと話し合ったばかり。本日の内容も重要なテーマ。直方市が子育てしやすく住みやすい街になるよう取り組んでいきたいと思っている。忌憚のない意見を聞かせて欲しい。≪意見交換≫**１．不登校について**【川口理事】卒園児やその保護者等の繋がりから、学校にいけないというこどもたちは、私の身の回りにもたくさん居ます。今日はそんな子たちにも参加してもらっています。【生徒１】中学の頃、不登校で学校に行けなかった。不登校の子たちも色々思っていることはある。その思いを学校側に伝える手段がほしい。当時は、みんなに見られるのが怖くて、教室に入るのがイヤだった。ひとりで個別に勉強できる場所が欲しかった。【生徒２】不登校になった理由は、学校で髪型をからかわれたりしたことがきっかけ。僕も人と会わずにひとりで勉強できる場所が欲しい。【生徒3】学校は教室には行けないけど、部活には参加できている。校内にフリースクールみたいなものがあれば行けるかも。【女性1】中学3年生のこどもがいて、小6の時に起立性調節障害という病気を発症した。朝、血圧が低く起きられない。学校では「きついのであれば保健室で寝ることはできるが、病人が来たら教室に戻る」よう言われた。また、「別の教室で授業を受けたい」と申し出たところ、教員が足りないため2時間という制限を設けられ、2時間を別室で過ごした後は早退するしかなかった。他にも学校に行けない理由として、緊急保護者会が開かれるほど学校が荒れていたこと。そのような中で学習をしたくないから、別室での授業を学校に求めたが認められなかった。そのような状況のため、1学期の三者面談では「行ける高校はない」と言われている。教育委員会としては適応指導教室を進めるが、そこに行くにも制限があり、かなり難しい状況。適応指導教室の他に、保護者の送迎の負担がなく、そこに行けば出席扱いとなるような施設を市内に作って欲しい。【女性2】中学２年生のこどもがいます。不登校とは違うが、１年生の２学期から学校に行くのが難しくなり、学校の保健室や適応指導教室を活用していた。２年生になりだんだん行けるようになったが、やはり教室には行けない。中学校では教室に行けないこどもたちのために、ハートルームというものが用意されている。先生方が空き時間に授業してくれる時もあるが、勉強については自習が基本。現在は小中学生にタブレットが配布されているので、それを活用して、教室とハートルームをオンラインで繋いで授業が受けられるようにしてもらえるとありがたい。【女性３】こどもが小学生の時から不登校になった。適応指導教室の存在を知り、相談に行ったが、利用者が多いため小学生は対応できないと言われた。他市では小学生でも利用できると聞いたのに、直方市では利用できないのは残念に感じた。今は小学生でも不登校児は多い。そのようなこどもたちが通えるところがあると嬉しい。【女性4】今日、来られなかった方から意見を預かって来たので紹介します。・発達障害の子が増加傾向にあり、支援学級を希望しても入れないことがある。支援学級を増やすことはできないか。・学校に心理士などの専門知識をもった職種を配置して欲しい。・放課後や休日に友だちと集まって学習できるような場所がない。児童館など憩いの場になるような場所を作ることはできないのか。・市長が立候補される際、子育てしやすい環境づくりに力を入れるとおっしゃっていたが、あまり変化がないように感じている。今後どのようにしていくのか伺いたい。私は個人的にシングルマザーで１５歳未満のこどもがいる家庭を支援している。その中でも学校に行けないこどもがいて、学校に相談しても人員不足等の理由で保健室登校もダメだと言われたという話を聞いた。色々な課題があるとは思うが、そういうこどもたちの気持ちも尊重して欲しい。【とんの幼稚園副園長】発達が遅いこどもは年々増えている。頓野幼稚園でそのような子が入園した場合、病院等の診断が重くつかない限りは、他のこどもたちと同様に対応する。そういったこどもが複数人いると、担任には非常に負荷がかかる。この状況が続くのはまずいと感じ、何か手段がないかということで、９月から心理士にカウンセリングをお願いしながら、先生たちのサポートはもちろん、どうやったらこどもたちが園での生活を過ごしやすくなるのか、その子たちが今後どうやったら生きていきやすいのかということを、こども・園・保護者で話し合っていくという試みを試していこうとしている。うまくいけば小学校に上がった時にもサポートがしやすく、保護者の関わり方も明確にできる。これはこどもや保護者のためでもあり、担任の先生のためでもある。【心理士】昨年まで市の学校教育課で臨床心理士として勤務していた。９月からは今ご紹介のあった取り組みで頓野幼稚園と関わっていく。市のこども育成課では巡回相談という制度があり、希望する園に関しては専門家を園に派遣しこどもたちの様子を見ている。あくまで希望する園への支援。母子保健係は、３歳までのこどもの発達をしっかり観察している。５歳児からは学校教育課の臨床心理士が様子を観察し、必要な場合は学校に繋ぐこともしていたが、今回の頓野幼稚園の取組はそれをカバーするような取り組みとなり、こどもが小学校にあがる際に、学校側がこどもを理解して支援することに繋がるし、教員の負担も軽減する取り組みになる。　　先ほど、意見された方の中に「学校に専門知識をもった人を配置して欲しい」という意見がありましたが、スクールカウンセラーという専門職がいます。ただし、中学校は週１回、小学校は月１回しか勤務しないため、なかなか相談もしづらいし、支援に繋がらないという現状を市には把握しておいてほしい。　　また、建設中の保健福祉センターに適応指導教室が入ると聞いているが、そこに心理の専門家を配置し、中学生だけでなく小学生にも対応できるようにしてあげてほしい。【女性5】うちはスクールカウンセラーに相談はしていたが、解決はしなかった。学校に行けないから自宅でオンライン授業かと言っても、学校に行けていないからタブレットを見てもわからない。学校にも行けていないのにフリースクールに通うのも難しい。仮に通うとなっても交通機関も充実していないから、自分たちで行くことも困難。結局、自宅にいさせるしかない。いろいろな支援があるかもしれないが、マッチしていないと感じる。【川口理事】私たち大人がしないといけないことは、生きていく力をどうつけてあげるか、ということ。そのために学校に行くことであったり、こどもたちや保護者たちが共通の話題を話せる居場所を作ってあげることだったりができればと思っている。【市長】教育委員の方々とは総合教育委員会で意見交換をすることはあるが、保護者の方々や学校の先生の声を聴く機会がほとんどなく、現場が見えていなかったと反省した。皆さんの意見から様々な事情を抱えて、そのことで学びの保障ができていないという現実が分かった。建設中の保健福祉センターには適応指導教室が入るが、そこには小学生も入れるようなキャパを持たせて、将来に向けての体制づくりをしていく。学校でもどういう場所が良いかという問題はあるが、個別の学びが出来る場所で、タブレット等を活用して授業を視聴するという意見も検討したい。今あるものをうまく活用して、国も提唱している「個別最適な学び」をどのように提供していくかが問われているのだと痛感した。　　あわせて、一人だけでは学ぶのは難しい、何らかのグループや友だちを作りながら学んでいくという「協働的な学び」、この二つが求められていると思っている。　　折角、この機会にいただいた貴重な意見は教育委員会とも共有して、一歩でも前に進めたい。**２．妊婦・産後ケアーに対する事業**【女性】「私の秘密基地」という子育て支援団体を運営している。2024年12月からこども食堂と外遊び、ちょっくラジオで情報発信の活動をしている。産後ママの居場所として、拠点を持たない巡回スタイルで活動中。自分も市内で３人のこどもの子育てをしているが、こども同士そして親同士の繋がりが薄いと感じることが多かったため、居場所づくりとしてこども食堂等の活動を始めた。活動開始から半年で300～400世帯、1000人以上の方々との出会いがあった。その中で産後ママの疲弊感を感じることが多く、その方々に特化した支援ができないかと考え、市内の飲食店、弁当屋と提携して宅食事業を開始しようと思っている。**３．小学校再編について**【男性】市教育員会との懇話会に参加し、小中学校の現状を勉強した。市内の年齢別人口を見ると20歳で500人、10歳でも500人いるが、5歳では400人、0歳では300人になる。この10年で見てもこどもの減少率は急激なものになっている。現状、南小学校の生徒数は各学年15人程度。これが10年後になったらと考えると、そろそろ学校再編について考える時期なのかなと思っている。学校が多いことで財政的な制約もあり、また、生徒数が少なすぎるとこどもたちのクラス替えもできない。学年で5人しかいない生徒の中から友だちを見つけるより、50人の中からの方が気の合う友だちは見つけられるはず。そのような環境を整えてあげられるのは我々、大人の責任じゃないかと思っている。教育というのは地域社会の根幹であり、重要な行政課題だという意識で再編を考えていただきたい。【女性】全校生徒100人に満たない小学校で過ごした生徒が全校生徒500人規模の中学校に入学する。それが不登校に繋がるというケースもある。また、学校数が多いため教員が分散し、生徒に手厚い支援ができないということもある。教育現場としても学校規模の見直しを前向きに考えていただきたい。【市長】（2.妊婦・産後ケアーに対する事業について）母親の元気がないとこどもにも良くない影響を与える、というのはごもっともな意見だと思う。こどもにも居場所が必要なように、母親にもネットワークがあって意見交換・情報共有することは重要だと感じた。市でも子育て支援センター等で、子育て広場的な形で世代を超えて、意見交換・情報共有などできる仕掛けをやっているはずだが、機能していないところもあるのかと反省している。先日、市内にフリースクールが開設したが、こどもの居場所も母親の居場所も、行政だけでは手の届かない所は「民」の力で、それぞれが連携して困っている方々への助けになれればと思っている。　（3.小学校再編について）学校の規模適正かについては、過去にも議論にあがっていたが、頓挫してしまった経緯がある。今また、総合教育委員会でもこの問題を取り上げている。生徒数の少ない学校においては、複式学級という話も出てくるが、こどもたちの学びという点では好ましいことではなく、これには早急に対応する必要がある。国の示すモデルでは各校12～18学級が望ましいとされており、各校の規模感に差があるのは教育環境的にも良くない。また、教員側にとっての負担軽減という視点も重要。市教育委員会では、この問題を適正化委員会に諮問し、8月末に答申が出されたと聞いている。それを受けて教育委員会としての方針が出ると思うので、市長部局としてはそれをしっかりと支えていきたい。 |